

説教「主の食卓に集う」 伊藤節彦 牧師

(2016年4月3日 復活後第1主日礼拝)

【序】

私達はかけがえのない大切な人を失った時、悲しみや痛みと同時に、心の中、生活の中に大きな喪失感が生まれるのを知っております。例えば家族であれば、一緒に過ごした家のここそこに多くの思い出が刻まれていて、失った方の存在を無言で指し示すかのようなのです。普段家に帰れば、そこにいるはずの人がいない。そのことを思う時、私達の足取りは重くなり、もはや在りし日の我が家とは異なるやりきれない空気がそこには流れていることでしょう。



聖書には、そのように大切な人を失って、大きな喪失感、挫折感に打ちひしがれながら、エマオにある自宅へと向かう二人の弟子たちの姿が描かれております。しかし、この物語はそれだけで終わるものではありませんでした。

この物語には、「喪失」、「現存」、「招き」、「交わり」、「派遣」という礼拝、特に聖餐式を中心とした私達キリスト者の交わりの姿が描かれているのです。豊かで深いこの物語を語るには最低でも五回の説教が必要ですが、今日は特にこの中でも「招き」ということについて、ご一緒にみ言葉を聴いて参りたいと願っています。

【破】

二人の弟子たちのうち、一人の名はクレ

オパと言いました。彼らは十二弟子ではありませんでしたが、おそらく七十二人の弟子たちに数えられた者達であったのでしよう。十二使徒に負けず劣らず、主イエスの中に生きる希望、慰め、そして救い主としての期待をかけていたのでした。

花見の季節となりましたが、春は雨や風の季節でもあります。于武陵の漢詩の一節に「花ひらけば風雨多く、人生別離足る」という下りがあります。井伏鱒二はこれを「花に嵐のたとえもあるぞ、さよならだけが人生だ」と訳して有名になりました。

年を重ねるほどに、人生とは出会いの喜びよりも、別離の悲しみの方に彩られているように感じられる。また期待の多くはやがて失望へと変えられていくということも私達が経験することです。そうして本来柔らかで繊細な心の奥深いところが、知らず知らずのうち踏み固められるように頑なになっていってしまうのかもしれない。

この二人の弟子たちが味わっている深い喪失感を私達も信仰生活の中で感じているのではないのでしょうか。先週一週間、様々な場面で皆さんは喪失感や失望感を味わってこられたかもしれません。今朝、教会に向かう足取りも重かったかもしれない。家の中での家族のちょっとした出来事、職場での問題、自分の健康。私達が抱えている重荷に対して信仰生活がどうにも力になってこない、結びつかない、そのようなもどかしさ、無力感を感じていらっしゃる方もおいででしょう。

エマオへ向かう二人も、最初はそのように嘆き悲しみながら足下ばかり見ながら歩いていました。しかし、そこに主イエスが加わって下さいました。二人はもはや地面ではなく、その見知らぬ同行者の顔をのぞ

き込むように話しをし始めました。彼らはその人が主イエスだとは分かりません。しかし、この人は彼らが悲しんでいるその話に耳を傾けてくれました。仲間の裏切り、大切な人の非業の死、そして空っぽの墓。彼らはどこにも向けようのない思いを一気にこの同行者に語ったのです。



彼らが全てを語り尽くした時、この見知らぬ人が語り始めます。そうです。神さまは私達の訴えやつぶやきが絶えたところで語られるのです。けれども、その言葉は感傷的で優しい慰めの言葉ではありませんでした。

「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことをすべて信じられない者たち。メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」、このように語り始めるのです。

「物分かりが悪く、心が鈍い」、これは「愚かで、信じるに遅い者たちよ」と訳せる言葉です。これらの言葉は、この二人の男たちの心に突き刺さったことでしょう。「愚か者」という叱責は、私達の理性やプライドを傷つけます。しかし、私達の理性やプライドは神の子の十字架と復活を理解することは出来ないのです。だからこそ、神の御言葉は私達の心の鎧を先ず打ち砕くのです。

復活の主は、彼らが見えるようになるために、彼らを「愚か」と呼ばねばなりませんでした。それでは彼らが主から受けた挑戦は何だったのでしょか？

それは「信頼」です。私達は自分が経験した大きな悲しみや喪失にばかり目を向け

てしまいます。沢山の不平不満を抱え、悲しみの中に感傷的に留まろうとしてしまうのです。私達が悲しみの中を歩いている時に、主イエスは一緒に並んで道を行き聖書を解き明かして下さいます。しかし、私達はその方がイエスだとは分からず、一人の見知らぬ人だと思ってしまうのです。しかし、はっきりとは分からなくても「私達の心は燃えたではないか」と思えるような経験が与えられる。悲しみの中から私達を引き上げてくれる言葉が、そこで与えられるのです。

そして、その御言葉こそが主イエスがいまここにいて下さる「現存」を証明しているのです。聖餐式における主の現存、つまりそこに主がおられることは、先ずみ言葉によって示されます。この御言葉こそが、パンを裂くことの中に主イエスがおられることを明らかにするのです。私達は言葉の価値が低下してしまった世界に生きています。しかし、そのような世界にあって、尚、人を真に生かしうる言葉がここにあるのです。

【急】

主イエスと二人の弟子たちの一行は、目指す村に近づきました。しかし、主イエスはなおも先に行こうとされました。ここに一つの決断が迫られます。主イエスに共に留まって頂くか、そこで別れてしまうのか、という決断です。共に留まって頂くということは、自分の家に主人としてイエスをお迎えするという事です。私達がイエスを迎え入れなければ、イエスはいつまで経っても見知らぬ人のままで終わってしまうのです。

聖餐式でも、私達の信仰生活においても、大切な決断の一つに招きがあります。私達はどんな風にこの一人の見知らぬ人に語りかけるのでしょうか。「お目にかかって嬉しかった。とても励まされ元気になりました。残りの旅もお気をつけて。さようなら」。

それともこんな風に言うのでしょうか。

「あなたのみ言葉の解き明かしを聴いて、私の心は変えられつつあります。どうぞ私の家に来て、もっと深く真理を悟らせて下さい。そして、私がどこでどんな風に暮らし、何に喜び楽しみ、何に悲しみ憤っているのか、私の暮らしの全てをご覧下さい」。

このように語るのには簡単ではありません。私達は他人を信頼することに怯えています。もしかしたら自分自身にさえも隠して、見ようとしないうちの領域を抱えて生きています。もし自分自身をも信頼できないなら、どうやって他人を信頼することが出来るのでしょうか。にもかかわらず、私達の最も深いところにある望みは愛することと、そして愛されることです。主イエスは礼拝において、特に聖餐式においてそのことを深く私達に問うておられるのです。

皆様の中にも、まだ洗礼をお受けになっていらっしゃらない方もおられることでしょう。たとえどんなに教会の礼拝や交わりで慰めや励ましが得られたとしても、それは主イエスが与えて下さるものとは異なります。キリスト者とは、イエスを主として信頼し、十字架で私たちに与え尽された命の糧を共に頂く仲間です。カンパニーなのです。どうかこの命の糧と共に生きる仲間となって頂きたいと、主イエスは心から願っておられるのです。

その招きに応えるためにも、「お出でになって、私の所に泊まって下さい」という祈りが大切なのです。この祈りを通し、私達の中で働き給う主によって私たちの内側が変えられていくからです。信仰生活はこの祈りの繰り返しと言っても良い。この祈りを通して私たちの信仰は成長していくことが出来るからです。

食卓は親しい交わりの場所です。テーブルを囲んで私達はお互いを発見し合います。一緒に食べたり飲んだりしながら、古い物語に花を咲かせ、新しい物語を興味と期待をもって語り合うのです。一方で、お互い

の距離を痛いほど感じるのも食卓です。両親の間の緊張を子供たちが敏感に感じるのも食卓。兄弟や姉妹が怒り、妬みを表すのもまた食卓です。そこに愛情や友情、交わりがあるのか、それとも憎しみや分裂があるのか、それも食卓を囲んで私達は知るのである。



主イエスが弟子の家にお入りになった時から、そこは主の家となります。「一緒に食事の席についたとき、イエスはパンを取り、讃美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」。客がもてなす人になるのです。招かれた人が、今度は招いておられるのです。ここに福音の逆転が起こります。

食べること、それはごく日常的でありふれた出来事です。しかし神は私達に近づくためにその日常的な行為を、聖なる行為へと変えて下さるのです。どんなに幼い子ども、どんなにお歳を召された方でも見て、触って、臭いをかいで、食べて、飲んでという五感に訴える聖餐式は、神さまの恵みを実感することが出来るのです。

聖餐式で主イエスはご自身の全てを私達に与えて下さろうとしています。ご自身の命を、パンとぶどう酒をもって私達の体の中に新たな命と血となって生かして下さるのです。主のご復活は、クレオパたちだけでなく、私たちをも主の食卓へと招いて下さるのです。主が私達のこの交わりの中に共にいて下さることを、これから共に聖餐式を通して味わい確認し合いたいと思うのです。そしてこの恵みを通して、更に心の目を開いて頂き、復活の主と共に歩んで参りましょう。アーメン